国語総合

一　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

だいぶ以前に、農学専門のある先生から興味深い話を聞いたことがある。

その先生が留学していた頃、アメリカで人間の動物観を研究するというプロジェクトがあった。そのやり方は、例えば「一番美しい動物は何か」といったような質問を並べてアンケート調査を重ね、その答えが年齢、性別、職業、宗教、民族などでどのように違うか調べるのだという。

このことを聞いて、それは面白そうだから日本でも同じような調査をしようという話になった。うまく行けば日米比較文化論になるかもしれない。というわけでさっそく試みたのだが、これがどうもうまく行かない。アメリカでなら「一番美しい動物は」ときけば、すぐ「馬」とか「ライオン」とか、何か答えが返って来る。ところが同じ質問を日本人にすると、「さあ、何だろうな」とはなはだ㋐歯切れが悪い。そこを無理に、何でも一番美しいと思うものを挙げてほしいと言うと、「そうだなあ、夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところかな」といったような答えになる。「これでは㋑比較は無理だから、結局諦めました」とその先生は苦笑していた。

私がこの話を聞いて興味深いと思ったのは、それが動物観のⓐ差イ以上に、日本人とアメリカ人の美意識の違いをよく示すものと思われたからである。

アメリカも含めて、西欧世界においては、古代ギリシャ以来、「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるという考え方が強い。その秩序とは、左右①ソウショウ性であったり、部分と全体との比例関係であったり、あるいは基本的な②キカガク形態との類縁性など、

内容はさまざまであるが、いずれにしても客観的な原理に基づく秩序が美を生み出すという点においては一貫している。逆に言えば、そのような原理に基づいて作品を制作すれば、それは「美」を表現したものとなる。

ⓑテン型的な例は、現在でもしばしば話題となる八頭身の美学であろう。人間の頭部と身長が一対八の比例関係にあるとき最も美しいという考え方は、紀元前四世紀のギリシャにおいて成立した美の原理である。ギリシャ人たちは、このような原理を「カノン（規準）」と呼んだ。「カノン」の中身は場合によっては変わり得る。現に紀元前五世紀においては、優美な八頭身よりも③ソウチョウな七頭身が規準とされた。だが七頭身にせよ八頭身にせよ、何かある原理が美を生み出すという思想は変わらない。ギリシャ彫刻の持つ魅力は、この美学に由来するところが大きい。

もっとも、この時期の彫刻作品はほとんど失われてしまって残っていない。残されたのは大部分ローマ時代のコピーである。しかししばしば不完全なそれらのⓒモ刻作品を通して、かなりの程度まで原作の姿をうかがうことができるのは、美の原理である「カノン」がそこに実現されているからにほかならない。原理に基づいて制作されている以上、彫刻作品そのものがまさしく「美」を表わすものとなるのである。

だがこのような実体物として美を捉えるという考え方は、日本人の美意識のなかではそれほど大きな場所を占めているようには思われない。日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、むしろどのような場合に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。それはウ「実体の美」に対して、「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という一句は、「古池」や「蛙」が美しいと言っているわけではなく、もちろん「水の音」が妙音だと主張しているのでもない。ただ古い池に蛙が飛び込んだその一瞬、そこに生じる緊張感を孕んだ深い④セイジャクの世界に芭蕉はそれまでに

ない新しい美を見出した。そこには何の実体物もなく、あるのはただ状況だけなのである。

日本人のこのような美意識を最もよく示す例の一つは、「春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……」という文章で知られる『枕草子』冒頭の段であろう。これは春夏秋冬それぞれの季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉えた、【　A　】模範的な「状況の美」の世界である。【　B　】春ならば夜明け、夏は夜、そして秋は夕暮というわけだが、その秋について、清少納言は次のように述べている。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし……。

これはまさしく「夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところ」というあの現代人の美意識にそのままつながる感覚と言ってよいであろう。日本人の感性は、千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている。

「実体の美」は、そのもの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」であり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシャの植民地であった地中海のある島で造られたが、二一世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。仮に砂漠のなかにぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。【　C　】「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮れの美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえに、また、美とは万古不易のものではなく、うつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、

いっそう貴重で、いっそう愛すべきものという感覚である。日本人が、春の花見、秋の月見などの季節ごとの美の鑑賞を、年中行事として特に好んで今でも繰り返しているのも、㋓そのためであろう。

実際、清少納言が的確に見抜いたように、日本人にとっての美とは、季節の移り変わりや時間の流れなど、自然の営みと密接に結びついている。そのことは江戸期に広く一般大衆のあいだで好まれた各地の名所絵を見てみればよくわかる。

名所絵とは、文字通りそれぞれの土地において見るべき場所、訪れる価値のある所を描き出したものだが、単なる場所ではない。例えば、広重の晩年の名作《名所江戸百景》を見てみると、雪晴れの日本橋とか、花の飛鳥山など、季節ごとの自然と一つになった情景が描き出されている。事実この連作シリーズは、まとまったかたちとしては、春夏秋冬の四部に分類されている。しかしそのように分類したのは広重ではない。広重は、江戸のなかの見るべき場所を、特に順序立てずに、いわば思いつくままばらばらに描き出して行った。それが好評であったので、次々と続けて、百十八点まで描いたところで彼は世を去った。その後ⓓハン元が、別の画家に追加分を一点と扉絵の制作を依頼し、あわせて計百二十点の「揃物」として刊行したが、そのときに内容を四季に分類したのである。ということは、当初ばらばらに描いた「名所」が、いずれも季節の風物や年中行事と結びついていたので、自ずから分類が成り立ったということである。【　D　】名所そのものが、江戸の町と自然との結びつきによって生まれて来たのである。

かつての名所絵がそうであったように、今日でも人々は、旅をするとその記念や土産ものとして、土地の観光絵葉書を買い求める。パリやローマに行くと、土産物屋の店先にさまざまの絵葉書が並んでいるが、そのほとんどは、ノートルダム大聖堂とか、凱旋門とか、エッフェル塔など、代表的なモニュメントをそのまま捉えたものである。だが日本の観光絵葉書を見てみると、満開の桜の下の清水寺とか、雪に⑤オオ

われた金閣寺など、季節のよそおいをこらしたものがⓔ圧トウ的に多い。もちろん、清水寺も金閣寺も、それ自体見事な建築だが、観光写真はそこに自然の変化を組み合わせることを好むのである。それもまた、「状況の美」を愛する日本人の美意識の表われであろうか。

（高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』※一部改変）

問一　傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　ⓐ～ⓔの各熟語の傍線部と同じ漢字を使用する熟語はどれか。該当するものを一つ選び、（ア）～（オ）の記号で答えなさい。

ⓐ 差イ　（ア）イ作　（イ）脅イ　（ウ）弔イ　（エ）イ問　（オ）イ変

ⓑ テン型　（ア）テン雅　（イ）仰テン　（ウ）テン換　（エ）テン示　（オ）論テン

ⓒ モ刻　（ア）モ擬　（イ）繁モ　（ウ）モ塩　（エ）モ者　（オ）モ服

ⓓ ハン元　（ア）量ハン　（イ）規ハン　（ウ）ハン然　（エ）ハン動　（オ）初ハン

ⓔ 圧トウ　（ア）トウ病　（イ）トウ産　（ウ）正トウ　（エ）トウ襲　（オ）系トウ

問三　傍線部㋐「歯切れが悪い」の言い換えが不適切なものを、選択肢から一つ選び記号で答えなさい。

ア　二の足を踏む

イ　逡巡する
ウ　躊躇する
エ　思いあぐねる
オ　呆然とする

問四　傍線部㋑「比較は無理」とあるが、なぜなのだろうか。説明しなさい。

問五　傍線部㋒「「実体の美」に対して、「状況の美」」とあるが、「実体の美」「状況の美」それぞれについて、文中の言葉を用いて説明しなさい。

問六　空欄【　A　】【　B　】【　C　】【　D　】に入る組み合わせとして最もふさわしいものを選択肢から選び、記号で答えなさい。

ア　A　すなわち　B　つまり　C　いわば　D　だが
イ　A　つまり　B　いわば　C　すなわち　D　だが
ウ　A　だが　B　すなわち　C　いわば　D　つまり
エ　A　いわば　B　すなわち　C　だが　D　つまり

問七　傍線部㋓「そのため」は、具体的にどういうことか。文中の表現を使い、文末を「……から。」や「……ため。」として、説明しなさい。

問八　この文章の内容と合致しないものを選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　西欧世界では、客観的な原理に基づいて制作された作品は一貫して「美」である。

イ　ギリシャ彫刻のカノンは、紀元前四世紀と紀元前五世紀では異なるものであった。

ウ　オリジナルではなく、たとえコピーであったとしてもギリシャ彫刻の魅力は損なわれることはない。

エ　『枕草子』冒頭の段と、江戸期に一般大衆のあいだで好まれた名所絵の二つが、この文中にある日本人にとっての美の具体例である。

オ　日本の観光絵葉書の特徴は、建築物などと共に自然の変化が組み合わさっていることである。

二　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

印象派の時代以来、音楽は、絵に強く影響し始めた。ゴッホの手紙を開いてみても、色彩の orchestration（管絃楽編成）という言葉が屢々（しばしば）使われている。色とは ton（音）、正確に言えば、tonalité（音調）の事だ。画家は色を塗るのではない、ton（色調）を編成するのだ。セザンヌは、motif という言葉を好んで使った。アトリエを出て、ⓐガカを担（かつ）いで、motif を捜しに行くという風に言った。sujet（画題）を捜しに行くのではない、展開すべき motif（導調）を見附けに行くのだ、というわけだ。セザンヌの使った独特な色彩の技法に、modulation とか gradation とかいうものがある。こういう言葉の意味を正確に定義する事は難しい。セザンヌの手紙や伝記にⓑサンケンされる彼の言葉から

見ても、当人さえ正確には使っていない様に思われるので、①それは仕方がないとしても、こういう言葉が音楽家の言葉から来ている事には間違いない。modeler という言葉は、モデルに倣(なら)って、形を作り出すという意味だが、画家は平面の上で立体のモデルの形を決めねばならないから、画家が modeler するとは、凹凸の感じを色の明暗によって現す意味になる。【　A　】、セザンヌは、modeler という普通の言葉を使うのを嫌った。modeler というより moduler と言うべきだ、と言うのである。そう呼んだところで©ガイネンの上では、違った事にはならないのだが、画面に物の量感を出す為(ため)に、様々な色調の調和とか対照とかに独特な工夫を凝らしていると、実感として音楽家の使う moduler（変調する）とか modulation（変調）とかいう言葉が使いたくなる、そういう次第なのであろう。gradation※1という言葉にしても②同じ事で、これは、メロディとかリズムとかの運動が、ピアノからフォルテに、或(あるい)はレント※2からヴィヴァチェ※3に移って行く場合に生ずる、区切りをつけては聞き分けられぬニュアンスを言うのだが、そういう言葉をセザンヌが好んだという事は、色彩を、暖色から冷色に至る音階のなかに動く音の運動として扱う感性に由来すると考えていい。要するに、そういう風に、音楽家の用語が、画家の用語になって来たという事は、絵に与えた音楽の影響が、決して表面上の事ではなかったという事を示している。

セザンヌは、光の波とともに浮動する印象主義の風景を何とかして安定させようとした。彼の眼は、自然の拡(ひろが)りより、自然の奥行に向けられ、瞬間の印象より、持続する実体を捕らえようとした。そうして出来上ったセザンヌの絵の独特の魅力は、建築的という言葉で、普通言われているが、それは、やはり音楽的だと言っても差支(さしつか)えないと思う。セザンヌは大変音楽を愛した人だ。彼の好んだモチフという言葉は、

※1　グラダシオン（フランス語）。英語のグラデーション。徐々に変化していくこと。漸次的推移。
※2　音楽の速度標語で「ゆっくりと」の意。イタリア語。
※3　音楽の速度標語で「きわめて速く」の意。イタリア語。

ワグネル※4が有名にした言葉であるし、セザンヌの若い時の絵には、「タンホイザー」※5を主題にしたものが何枚もある。

彼が、「タンホイザー」に感動したのは、恐らくボードレール※6がタンホイザー論を書いたのと同じ頃の事だったであろう。そして、セザンヌがボードレールを尊敬していた事も間違いはないだろう。言う迄(まで)もなく、ワグネルはロマン派※7音楽の発達の頂点に現れた、管絃楽製作の達人であった。器楽的和声音楽※8の大理論家であった。そういう人が歌劇に夢中になったについては、彼には彼なりの理由があったのであって、彼には、演劇に音楽を当てはめるという様な考えは少しもなかった、寧(むし)ろ逆で、音楽から劇が流れ出したのである。ベートーヴェン以来、和声の転調や音の色彩の利用が急速に発達して、和声の機構或はダイナミックが、拡大し複雑化し、ワグネルに到(いた)って音楽は、その表現力の万能ではち切れんばかりになった。言わば音の感動のⓓシンプクが極限に達した。そういう時に、音楽現象を、そのまま音が演ずる劇とワグネルが感じたのは、極めて自然だった。表現力の万能がはち切れて、従来の管絃楽の標題音楽的観念を突破し、舞台の上で形象化するに至る、そういう風に音楽を感受したのも、ワグネルには自然な事だった。「バレーのない歌劇」に腹を立てた当時のパリ人に抗して、ボードレールがⓔカンパしたのは、ワグネル歌劇の③そういう原動力だった。彼が動かされたものは、ワグネルの音楽の文学化された或は視覚化された姿ではない。音楽の影響を受けて、普通な意味で音楽的な詩を書こうとしたのではない。そんなものなら誰でも書いているのである。

※4　ワーグナー。ドイツの作曲家。
※5　ワーグナー作詞・作曲の歌劇。
※6　フランスの詩人。
※7　「ロマン派」は、一八世紀末から一九世紀初頭にヨーロッパで展開された芸術上の思潮・運動。自然・感情・空想・個性・自由の価値を重視する。
※8　「器楽」は声楽を含まない楽器のみによる音楽。「和声」はハーモニー。ある旋律を中心に音楽を重層的に構成すること。

Ⓐ彼が音楽から、詩の為に奪おうとした富とは、彼に続いたサンボリスト詩人達※9の仕事を見れば明らかな様に、近代音楽の内部構造そのものだったのである。セザンヌの音楽に対する憧憬（しょうけい）にも④同じ性質のものがあったと考えてよい。「タンホイザー」の演奏を聞いて一気に書かれたワグネル論に現れた美文調に惑わされてはいけない。そんなものは何でもない。それよりも、「批評家が詩人になるという事は、驚くべき事かも知れないが、詩人が、自分の裡（うち）に、批評家を蔵しないという事は不可能だ。私は、詩人を、あらゆる批評家中の最大の批評家とみなす」という彼の有名な言葉は、ワグネル論の中にあるという事が大事なのである。純粋詩の運動の先駆者としてのボードレールには、自然に発生した歌、例えば民謡の様に、詩と音楽とが渾然（こんぜん）と統一していて、歌うものはそれを意識さえしない、そういうところに現れる純粋性ほど遠いものはなく、そういうものへの復帰を、Ⓑ彼は希（ねが）ったのでもない。彼にとっては、それは純粋性というより寧ろ自然性なのであって、その場合、人はただ歌を歌っているので、歌を作っているのではない。

（小林秀雄『近代絵画』※一部改変）

問一　傍線部ⓐ～ⓔのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線部①「それ」は何を指すか。文中から適切な箇所をそのまま抜き出して、答えなさい。

※9　「サンボリスト」は象徴派。一九世紀後半、フランスの詩壇に興った思潮。内面的思考や主観的情緒を表現しようとし、そのため個々の言葉が伝統的、慣習的に持つ意味内容によって描写するのではなく、詩語と詩語とを組合わせることで新たな暗示的イメージを喚起し、読者の想像力に訴えた。

問三　空欄【　A　】には接続詞が入る。選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ところが
イ　いっぽうで
ウ　また
エ　すなわち
オ　ただし

問四　傍線部②「同じ事」とは、何と同じなのか。文中の表現を使い、文の終わりを「～と同じだということ。」の形にして答えなさい。

問五　以下のうち、筆者の述べるセザンヌの仕事にあてはまらないものはどれか。選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　浮動する印象主義の風景を何とかして安定させようとした。
イ　自然の奥行に眼が向けられた。
ウ　印象よりも、実体を捕らえようとした。
エ　音楽的であるが、建築的というわけではなかった。
オ　モチフという言葉を好んだ。

問六　傍線部③「そういう」とは、具体的にどのようなことか。文中の該当箇所を、そのまま抜き出して答えなさい。

問七　傍線部Ⓐ「彼」と、傍線部Ⓑ「彼」にあてはまるものを選択肢から選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⓐ　ア　セザンヌ　　イ　ワグネル　　ウ　ボードレール

Ⓑ　ア　セザンヌ　　イ　ワグネル　　ウ　ボードレール

問八　傍線部④「同じ性質のもの」とは、何を指すか。文中の該当箇所を、そのまま抜き出して答えなさい。

三　次の各問に答えなさい。

問一　カッコ内の傍線部の読みが不適切なものを選択肢から選び、記号で答えなさい。

ア　発言を遡って（たどって）議事録を書いた。

イ　度重なる違反で信頼関係に間隙（かんげき）が生じた。

ウ　眩しい（まぶしい）ので、カーテンを閉めてください。

エ　悲しみのあまり茫然（ぼうぜん）とした。

オ　彼は土気色（つちけいろ）の顔をこちらに向けて、座ったままだった。

問二　①～③の傍線カタカナ部には、異なる熟語が入る。それぞれ文意に即して漢字に直しなさい。同じ解答が複数の解答欄に書いてある場合には、すべて誤りとする。

① 彼は王位をケイショウすることになっていた。

② ケイショウを略さずに書いてください。

③ 著者は気候変動問題に対してケイショウを鳴らしている。

問三　次のことわざに似た意味のことわざを選択肢から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 弘法も筆のあやまり　② 紺屋の白ばかま　③ 忠言耳にさからう　④ 石橋を叩いて渡る　⑤ 雉も鳴かずば撃たれまい

ア 医者の不養生　イ 良薬は口に苦し　ウ 口は災いのもと　エ ひょうたんから駒が出る　オ 河童の川流れ　カ 転ばぬ先の杖

問四　次のそれぞれの語の対義語または類義語を選択肢から選び、記号で答えなさい。解答した記号の下に、対義語の場合はa、類義語の場合はbの記号を、それぞれ書きなさい。

① 排斥　② 奔走　③ 混濁　④ 調停　⑤ 俊敏　⑥ 矛盾

〔選択肢〕
・ア 愚鈍　・イ 尽力　・ウ 丁重　・エ 清澄　・オ 困惑
・カ 微笑　・キ 納得　・ク 疎外　・ケ 仲裁　・コ 背反

問五　次の文中には漢字の変換ミスが三箇所ある。誤っている語を順番に単語ごと抜き出して書き、さらにそれを正しい漢字に直して解答欄に書きなさい。

もちろん、人の説明を受けるのは悪いことではありません。説明が無駄だというのでもありません。しかし、過乗な説明が肌感覚を封じ込めるのも事実です。本が読めなくなっているということとは、「からだ」からの肌感覚を取り戻せ、という合図なのかもしれません。情報周集としての読書に「からだ」が巨否反応を起こしているのかもしれないのです。

（若松英輔『本を読めなくなった人のための読書論』※一部改変）

問六　次の慣用表現の空欄に入るものを選択肢から選び、記号で答えなさい。

①　尻馬に〈　　〉

ア　付く　　イ　退く　　ウ　乗る　　エ　走る　　オ　上げる

②　業を〈　　〉

ア　耕す　　イ　褒める　　ウ　たぎる　　エ　増やす　　オ　煮やす

③　舌の〈　　〉の乾かぬうち

ア　端　　イ　中　　ウ　上　　エ　先　　オ　根